

信 毎 俳 壇

神野 紗希 選

- 風鈴の舌を括りて旅立ちぬ
 ひまわりや棒切れで描く月面図
 報復の果てに炎暑の砂の海
 熊泳ぐ湖面一枚夏盛り
 かみねんとこねこねはにわつくるなつ
 魁伸ばし先ずはたがひのかき氷
 黒百合と君の瞳と山恋し
 母子憩ふ湖畔の合歓の花の下
 作業着にペンキの匂ふ三尺寝
 かんかん照る日に応ふ滑車
 佳作
 詩も街の一部であつた冬灯
 避暑散歩カップに残る紅の色
 (上田市) 竹内 重美
 (長野市) 萩原 宏祐
 (松本市) 伊藤 和夫
 (長野市) 武田 芳子
 (中野市) 風間 一乃
 (佐久市) 町田ゆかり
 (松川村) 岡 豊村
 (長野市) 栗津原吉弘
 (長野市) 田中 重実
 (長野市) 井出 節子
 (熊本市) 夏風かをる
 (軽井沢町) 柳沢 昂子

一句目、入院して一週間で帰らぬ人となったお姉さまを思つての作。舌は風鈴の重りで、風に揺れて本体とぶつかり音が鳴る。鳴らないよう舌を括って身辺を整えて…残された無音に立ち尽くす。二句目、太陽を追うひまわりと、想像の月と。拾った棒で地面に描く月面図は、宇宙への素朴な憧れを体現する。三句目、報復に報復を重ねた果ての砂漠は、人類以後の風景か。炎暑の夏がじりじり迫る。

坊城 俊樹 選

- 七月の大海原や鯨の恋
 暴君の骸も餌なり蟻の列
 旗印波の高きや氷水
 纏りし影に覆く炎天下
 吾子の手に託す花火の球爆せて
 緑蔭や太極拳のゆるき円
 ポケットの多き服運る夏休み
 夏休み皆来て雑魚寝奥座敷
 横縞のシャツのゆがみし晩夏光
 年とりて浴衣の柄に拘りぬ
 佳作
 酷暑なり客の居眠る地域バス
 獅子頭脱げば校長夏まつり
 (長野市) 武田 芳子
 (須坂市) 富田 孝弘
 (長野市) 福沢健太郎
 (長野市) 萩原 宏祐
 (佐久市) 真山 邦弘
 (安曇野市) 丸山 進也
 (長野市) 富沢 朝子
 (中野市) 芋川 菊水
 (佐久市) 佐藤 勝子
 (長野市) 富沢 信博
 (岡谷市) 吉池富貴勇
 (飯山市) 田中 琢雄

一句目、鯨は我々と同じ哺乳類と聞いている。ということは子孫繁栄のために恋もするだろう。真夏の海はそんな舞台に良く似合う。二句目、蟻という社会性のある虫の中には秩序がある。死体さ。えも餌になってしまう。飛躍してこれ、人間の暴君の事ではないか。三句目、海辺の風景。波の高さが記されている旗が立てられている。その真夏の風景が如何にも涼しげなのは氷水のせい。

今井 聖 選

- 空蟬や足の力の凄まじき
 椅子席を嫌ふ僧侶孟蘭盆会
 バスを待つ全員日傘スマートフォン
 父逝きて早や五十年夏の雲
 祭り道露店の並び縮みをり
 じれつたい程の音速遠花火
 チューニングギターと含めて月涼し
 保護区を徒歩巡回の炎暑かな
 一年ぶり三角錐に西瓜切り
 新婚の蚊帳の導息の懐かしき
 佳作
 宿直の恐き話や古塵
 湧き水の青さより濃き若葉かな
 (佐久穂町) 石田 弘子
 (須坂市) 丸山 葵子
 (長野市) 富沢 朝子
 (飯綱町) 坂井 寿男
 (佐久市) 西田 和彦
 (立科町) 村田 実
 (長野市) 富沢 信博
 (松本市) 伊藤 和夫
 (松本市) 塩原 弥生
 (長野市) 竹前 正人
 (長野市) 武田 芳子
 (安曇野市) 丸山 進也

一句目、長年地中で過ごし、その後、地上に現れる蟬。特にその原動力となる足の力に着目した。まさに「凄まじき」。二句目、膝の具合の悪い僧侶が椅子を喜んだ。俳諧味の句と言えよう。三句目、こういう風景をよく眼にする。日傘も昨今は女性ばかりとは限らない。四句目、身内の忌日の句はよく見るが、五十回忌という句は珍しい。泉下の「父」もさぞやお慶びと思う。